WAU
Malaysia Cultural Post
芸能・映画・ごはん…ディープに伝えるマレーシア文化通信
2015
6
［ワウ］
No.04
マレー凧Wau〈ワウ〉のように、色鮮やかで誇り高いマレーシアの伝統芸能、ごはん、映画に焦点をあて、専門家がディープにご紹介するフリーペーパー
TAKE FREE



Bront Palarae
1978年生まれ。マレーシアの俳優。男性スタイル雑誌「Augst Man Malaysia」の2014年マン・オブ・ザ・イヤーに選ばれるなど順調な俳優業に加え、本名のNasrul Suhaiminとして、プロダクションハウス、ピクセルプレイのCEOをつとめ、インディペンデント映画制作などを手がける。タイ人の母を持つ。

人気、実績ともに急上昇中
熱い思いを秘めたクールガイ

マレーシアの俳優、ブロント・パラエ。彼は、マレーシアのメジャーテレビ局の連続ドラマの常連であり、マレーシア国内最高の興行成績を記録した映画『Ombak Rindu』に出演、さらに、国際的なジーンズのブランドEDWIN MALAYSIAの親善大使をつとめていると言えば、彼のマレーシアでの人気がお分かりいただけると思います。彼との出会いは、オッドピクチャーズの日マ共同製作、『クアラルンプールの夜明け』※1の際、ヒロイン役のシャリファ・アマニ（※ヤスミン・アフマド監督作品のオーキッド役で著名な人気女優、WAU創刊号・マレーシア映画ウィーク号参照）から、彼女の相手役として紹介されたのがきっかけでした。当時、彼は、2010年のマレーシア映画祭・最優秀男優賞を受賞した直後で人気上昇中でした。撮影では、出番が終わるとスタッフ一人一人に丁寧に挨拶をして帰る真摯な姿が印象的でした。

俳優・監督・脚本家・プロデューサー ブロント・パラエ
Bront Palarae

取材・文 Rie Takatsuka
（ODD PICTURES 日マ共同映画製作プロデューサー、マレーシア映画ウィーク主催）
写真提供 Takato Hosoi

「マレーシア映画ウィーク」開催はノヴァが発端?!

2014年、彼が主演の『ノヴァ～UFOを探して～』※2が東京国際映画祭「アジアの未来」部門で上映されました。来日していたブロントらチームと、いつか、日本の映画館で上映しましょうと約束してから約半年後の2015年4月、シネマート六本木の閉館企画のひとつとして「マレーシア映画ウィーク」を開催させていただくことになりました。もちろんノヴァをラインナップに入れたのは言うまでもありません。マレーシア映画ウィーク中、ASEAN国際映画祭で『ノヴァ』が最優秀作品賞、主演のブロントが最優秀男優賞を受賞したというニュースも飛び込んで来て話題に華を添えました。

ノヴァは、マレーシアの大手プロダクション、アストロショウの呼びかけにより、マレーシアのインディペンデントのプロデューサーが企画を出して作った作品で、ブロントが演じる主人公バーグが、彼の高校時代の映画仲間と、昔見たUFO探しの映画を撮りに行くという、捨てられない夢と友情を描いたロードムービーです。実は、ブロントは、もともと映画監督志望で、このストーリーは奇しくも学生時代の彼の経験にも重なる部分があり、演じながら当時を思い出していたそうです。

マレーシア映画界の未来を担うフィルムメーカーとして

俳優としての活動が多い彼ですが、俳優をはじめたきっかけは「いろいろな監督の頭の中にアプローチできるから」だと言い、昨今は、自身の脚本を自ら監督するなどインディペンデントのフィルムメーカーとしての活動にも力を入れています。日本も同様ですが、マレーシアでのインディペンデント映画の資金作りは簡単ではなく、自分たちの作りたいものを作るには、自分たちでその機会を創出するしかないと言います。そんな彼らの代表的な作品が『KOLUMPO』（2013）です。コメディタッチのラブストーリーで、シャリファ・アマニが主役、ブロントは共同脚本、共同監督をつとめています。※3

前述のようにブロント・パラエはマレーシアではかなり知名度のある俳優です。シャリファ・アマニも同様で、彼らのインディペンデントの活動が、今後のマレーシアの映画界に一石を投じる事になるかもしれません。今後、多彩な民族で構成されるマレーシア人のアイデンティティをどう描くか。彼らの活動にはそんな使命感もあるように思いました。マレーシアにとどまらない、国際舞台での活躍を期待しています。



※1『クアラルンプールの夜明け』(2013)
監督：細井尊人
主演：桧山あきひろ、シャリファ・アマニ
シネマレーシア(2013)にてワールドプレミア上映。TAMA CIEMA FORUM(2013)「ある視点」部門上映。



※2『ノヴァ～UFOを探して～』(2014)
監督：ニック・アミール・ムスタファ
第27回東京国際映画祭(ジャパンプレミア)。ASEAN国際映画祭最優秀作品賞。



※3『KOLUMPO』(2013)
共同監督・共同脚本：ブロント・パラエ、ロッジ・イズマ・アブドル・カリム、シーク・ムナサー
マレーシア・ニューウエーブの監督、ホー・ユーハンや、ブロント本人もカメオ出演しており、各国の映画祭でも好評価。

色とりどりの色んな「ゾウ」がマレーシアから世界に飛び出す







マレーシアを代表する絵本作家 ぞうのユソフさん

Yusof Gajah

自宅兼アトリエの工房は、ぞう、ゾウ、象、あちこちにガジャ(マレー語で象)、赤いガジャ、黄色いガジャ、青いの、グリーンの、鼻が長いの、耳が大きいの。ふと気がつくと柱の向こうの葉っぱの影からこちらを見つめる象。本当に、ここは「ぞうのユソフさん」の空間なんだ、と笑顔がこぼれます。ユソフ・ガジャこと、モハマド・ユソフ・ビン・イスマイルさんのアトリエでお話しを聞きました。



取材・文
Aki Uehara
Mutiara Arts Production



子供の頃のユソフさん

小学校の頃はどの学習ノートも落書きでいっぱいで、毎週、新しいノートに替えなければいけませんでした。スクラップブックも4、5冊持っていて、新聞や雑誌、海外の画家の絵など、気に入ったものは何でも切り抜いていました。でも、残念ながら全部どこかにいってしまいました(笑)。



なぜ「ユソフ・ガジャ」に?

1987年頃、画家や詩人のグループ「Kumpulan Anak Alam」に参加していました。そこには「ユソフ」という画家が2人いたんです。一人はフォルクスワーゲンの車に乗ってるユソフ・オスマン(Mohd Yusof Osman)さん。そして、いつも象(ガジャ)ばかり描いていた私です。そこで仲間たちは「ユソフ・フォルクスワーゲン」と「ユソフ・ガジャ」と呼ぶようになりました。



「ガジャ」を描くこと、水中にも象?

ガジャを描き続けて象のアイコンで有名になったのは良かったのですが、どんな絵を描いても必ず象が描かれていることを期待されます。仕事で絵を描くときも必ず象を描くことを要求されるので、コマーシャルの仕事で、水の中の絵であっても、象がいないとダメだと言われてしまうのは難しいことでもありますね。

子供のために

子供たちは素直で誠実だから、私は子供たちと一緒に絵を描くことが好きなんです。子供は気に入らないことは、はっきりと嫌だと言うし、先の人生も長い。彼らが次の世代を担うわけですから、私にとっても非常に重要なのです。





自宅アトリエでのワークショップ

自宅で絵本作家と絵描きのためのワークショップを週末に開催し、室内でも外でも自由に絵を描いてもらっています。参加費は無料ですが、条件は自分の食べ物を持参することです。ワークショップがあるときは、自宅に食べ物がたくさんあって、食のお祭りみたいですよ。



'96野間国際絵本原画コンクール※で大賞を受賞されています。日本での思い出は?

まずは、言葉の違いです。和食も印象的でした。お寿司、すき焼きなどが好きです。それから、知人と京都に行くとき、新幹線で自由席と指定席のチケットがあることを知らずに自由席のチケットで満員の電車に乗って、立って行かなければいけなかったのには驚きました。高いチケットを買って、立っていくなんてね(笑)。

※財団法人ユネスコ・アジア文化センターが、アジア太平洋(日本を除く)、中南米、アフリカ、アラブ地域の発表の機会に恵まれないイラストレーターや画家の作品を対象に開催したもの。(1978年―2008年で終了)









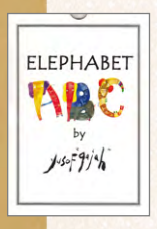


モハマド・ユソフ・ビン・イスマイル

Mohd Yusof Bin Ismail

マレーシアの絵本作家。絵本作品は、アルファベットをゾウで表現した『Elephabet』や、英語、中国語、韓国語、アラビア語など様々な言語に翻訳されている『Where is my Ball?』など多数。日本で出版された絵本に『やっぱりゾウがいちばん』(オリコン・エンタテインメント、2004年)。







マレーシアで人気 No.1 の伝統菓子。
1段ずつはがして遊ぶのも楽しい！



マレーシアン・スイーツ応援隊
キョン・チンファイ 隊員

クアラルンプール出身。35 年前に医師を目指して日本へ。ガーデンクリニック広尾の院長を務める。

名前では9段なのに、いつも7段なの!

「クエ・ラピスは、中国語では『九層糕』。9段のケーキという意味なのに、実際には7段しかありません。でも大好きです。ういろうとよく似ているので、主人が名古屋に出張したときには必ず買ってきてくれました」



クエ・ラピス

Kuih Lapis

もっちりとした食感と、ボーダー T シャツのような“しましま”の色合いが特徴。マレー菓子のお店には必ずある定番のスイーツで、ピンクのほかに、緑や青などの様々な色がある。ココナッツミルクを加えたクリーミーな甘さ。買ったその日に食べなければいけない生菓子。

マレーシアン・スイーツ応援隊登場！

わたしがオススメするマレーシアのカラフルスイーツ

取材・文　Oto Furukawa
(Writer,MalaysiaFoodNet)
写真提供　Chigumi Obayashi / Marhaimi Jamil

多種多彩なマレーシアのスイーツ。そのなかから、
3人のマレーシア人とマレーシア好きの日本人に、
ぜひ食べて欲しいオススメのスイーツを選んでもらいました。
思い出のエピソードとともに紹介します。

これぞ“口福(こうふく)”イリュージョン

「ひと目見た瞬間から心を奪われました。鮮やかな色彩を放ちつつ、天然素材を駆使したニョニャのクエ(お菓子)は食べるアートです。しかもその色合いや重ね具合は、奇抜なだけでは決してなく、歴史的な背景があるのです」



翡翠色のちゅるんちゅるんゼリーと
“グラ・マラッカ”の最強コンビ！



マレーシアン・スイーツ応援隊
大林(おおばやし) 千茱萸(ちくみ) 隊員

映画監督／フランス料理+西洋食作法講師。映画『100年ごはん』で“食べる”上映会は、日本全国で展開中。

チェンドル

Chendol

翡翠色のパンダンリーフのゼリーと小豆入り。そこにココナッツミルクと椰子砂糖の“グラ・マラッカ”をたっぷりかけた贅沢なかき氷。もともとはマラッカとペナンでしか味わえない“ご当地スイーツ”だったが、人気増加により、最近では色んな場所で食べられるようになった。

クエ・スリ・ムカ

Kuih Seri Muka

マレーシア版のおはぎ。もち米の上には、あんこのかわりに甘いココナッツクリームがのっている。緑色はパンダンリーフ、青色はブンガタラムという花の色素によるもので、どちらも天然のカラー。カラフルな見た目がマレーシアのスイーツの特徴で、民族衣装にも通じる色使い。



クエ・バカール

Kuih Bakar

お花型が可愛らしい焼き菓子。パサマラム(夜市)では、花びらごとに小分けにして販売している。しっとりとした生地の食感は、まるでフランス菓子のカヌレのよう。甘さはひかえめで、表面にちりばめられた胡麻が香ばしい。クエ・バカール・ケンボジャとも呼ぶ。



かけがえのない家族の時間

「幼い頃、祖母が作ったクエ・バカールを家族でよく食べました。今は、祖母は亡くなり、僕はこうして日本に住んでいますが、クエ・バカールを食べるとあの頃を思い出します。ちなみに、日本では柿ピーとチーザが好きです」

やさしい甘みとパンダンの香り。
祖母が作ってくれた思い出の味です。



マレーシアン・スイーツ応援隊
マルハイミ・ジャミル 隊員

ペナン出身、日本在住15年。湯葉や納豆などの和食も大好き。最近ではおかし作りに挑戦している。

近所のおばちゃんの店がベスト

「昔、日曜日になると必ずクエ・スリ・ムカを近所の屋台で買っていました。おばちゃんの手作りです。また、私はインド系のおやつも好きですが、とても甘いので頻繁には食べません。和菓子ではお団子が好きですね」

もち米の塩味と緑のクリームの甘み。
この“塩&甘”のコントラストが好き！



マレーシアン・スイーツ応援隊
サティアバマ・ティル 隊員

クアラルンプール出身。長岡技術科学大学の修士課程を卒業。2012 年より早稲田大学に進学。

マレーシアの語り部AWANG BATIL来日プログラム



photo by Zamree Salleh

7 月 26 日 (日) @ポレポレ坐東中野
Hati Malaysia マレーシア文化講座

7 月 27 日 (月) @アサヒアートスクエア
カンポンの夜・紡がれる物語
～村の語り部 AWANG BATIL～

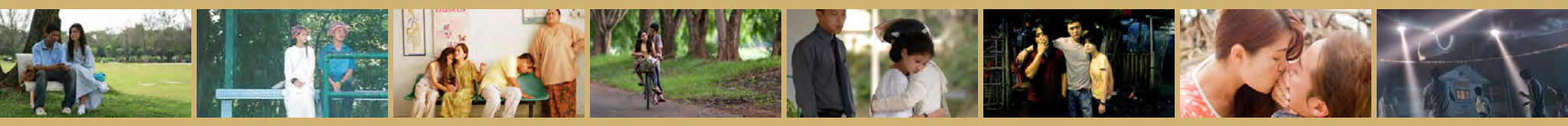
主催・お問い合わせ
ムティアラ・アーツ・プロダクション(上原)
mutiara.arts.production@gmail.com

AYAM Since 1892 アヤム
本格アジアン料理を手軽に

マレーシア発の老舗ブランド「アヤム」。
ココナッツミルク、カレーペーストで、
ご自宅で簡単にアジア料理が作れます！

http://www.ayam.jp
http://www.nbkk.co.jp





マレーシア映画ウィーク上映作品：左から【長編映画】ヤスミン・アフマド監督特集「タレンタイム」、「細い目」、「グプラ」、「ムクシン」、「ムアラフ 改心」、日馬インディペンデント作品「黒夜行路」、「盗人の第二の人生」、「ノヴァ ～ UFO を探して～」



ありがとうシネマート六本木 ー劇終ー THE LAST SHOW

"Malaysian Film Week"
マレーシア映画ウィーク

開催レポート マレーシアの文化や心に触れた9日間

2015年4月11日～19日、「マレーシア映画ウィーク」が、東京港区の「シネマート六本木」の閉館企画（6月14日閉館予定）「ー劇終ー THE LAST SHOW」の一環として開催されました。2005年、東京国際映画祭のアジアの風部門で、最優秀アジア映画賞を受賞した『細い目』をはじめ、数々の優れた作品を残して急逝したヤスミン・アフマド監督の作品を特集。ヤスミンにゆかりのあるマレーシアで活躍するVIPなゲストも訪れ、多くの皆様にマレーシア映画やマレーシアの文化の魅力をふんだんに感じていただけた9日間でした。わたしたちWAUを発行しているHati Malaysiaも運営事務局として全面的に協力したこの映画ウィークの様子をレポートいたします。

- 会期：2015 年 4 月 11 日（土）～ 4 月 19 日（日）
- 会場：シネマート六本木（〒106-0032 東京都港区六本木 3-8-15）
- 入場料：全席指定　前売り 1,400 円　当日 1,700 円
- 主催：混成アジア映画研究会、マレーシア映画文化研究会、ODD PICTURES
- 共催：国際交流基金アジアセンター、京都大学地域研究統合情報センター
- 後援：日本マレーシア協会
- 協力：Hati Malaysia、ムティアラ・アーツ・プロダクション、マレーシアごはんの会、株式会社 GreenCreate、東京国際映画祭、東京国立近代美術館、Astro Shaw
- 公式ウェブサイト：http://odd-pictures.asia/mfw

このたび、秀逸なアジア映画を上映し続けて来た、シネマート六本木の閉館企画の一つとして、「マレーシア映画ウィーク」を9日間にわたり開催させていただきました。初日と最終日をはじめ、満席になることも何度もあり、みなさまのマレーシア映画への期待を感じる事ができました。この場をお借りして心から御礼申し上げます。

日頃から、マレーシアの映画人との関わりの中で、彼らの作品をもっと日本にも紹介したいと思っていました。その一貫として始めたのが、このマレーシア文化通信WAUだったのですが、こんなにも早く実際に映画をご紹介する機会をいただく事ができるとは夢にも思っていませんでした。ただ、9日間もの枠をシネマートさんからお預かりすることになり、正直不安もありました。日本でのマレーシア映画の認知度はまだまだ低く、この機会にマレーシア映画を初めて見るという方もいらっしゃるかと思うと、その方々のファーストインプレッションに対して責任があると感じました。その上で、何をご紹介したらよいか考えたとき、やはりヤスミン・アフマド監督の作品だろうとすぐさま思い、この映画ウィークの中心をヤスミン特集とすることを決めました。ヤスミン監督の作品は、多民族国家でありながらも協調国家であると認識されているマレーシアの深い部分に横たわる人種や宗教観の問題をあますことなく描いており、それは人種を超えた愛や赦しといった人間の普遍的テーマです。日本人にもきっと通じるはずだと思いました。今回は、そのヤスミン監督の妹さんのオーキッド・アフマドさんをはじめ、シャリファ・アマニさん、ピート・テオさんなど、ヤスミン監督にゆかりのあるゲストをお呼びすることもできました。彼らの明るい人柄も相まって、多くの方がマレーシアという国との出会いを楽しんでいただけたように思います。

そして今回、マレーシアの映画について、もともとご存知であった方はもちろん、今回が初めてという方にも大変多くの反響をいただきました。それは、「マレーシア映画を初めて見て、もっとマレーシアの事が知りたくなった」というお声や、「マレーシア映画を観る機会を作ってくれてありがとう！」という心温まるお言葉でした。マレーシア映画ウィークの大きな目的としては、映画を通じて、マレーシアという国を、文化を伝えたいという事が挙げられますが、初日におこなった、我々 Hati Malaysia によるマレーシアフードを食べながらの食文化講座や、多民族国家ならではの、多言語がミックスされた日常会話を色付きの字幕で表現した「多色字幕版」の作品の上映など、映画館としては異例の試みにもチャレンジし、この映画ウィークをきっかけにマレーシアという国に親しんでいただけたのではないかと思います。

最後に、ヤスミン監督の作品をはじめとするマレーシアの秀逸な作品を見い出された東京国際映画祭さま、またマレーシア映画ウィークの開催に多大なるお力添えいただきました国際交流基金アジアセンターさま、そのほか、ここには書ききれないほどたくさんの、ご協力いただきました全ての皆様に、この場をお借りして御礼申し上げます。マレーシア映画のこれからを、またいつかご紹介できる機会があればと思います。

主催・オッドピクチャーズ プロデューサー
高塚利恵









Hati Malaysiaメンバーと『細い目』のオーキッド&ジェイソン（Sharifah Amani & Ng Choo Seong）

ヤスミンの魂を受け継ぐ「ヤスミンチルドレン」をめざして

彼女の存在は、私にとっての大きな道標。今でも何かあるたびにヤスミンならどうする?と考えます。10年前の2005年、東京国際映画祭の「アジアの風」部門の審査員として、彼女の作品『細い目』に出会いました。あの時代、多言語の現実を多言語のまま映画にした、というのはとても画期的。現実をそのまま映すのは、簡単そうにみえるけど、高度な技術が必要。ドキュメンタリー映画ではないので、エンターテインメントの要素も必要ですからね。

さらにヤスミンは、表現の方法として、保守的なイスラム教徒の神経を逆なでするようなセリフも入れていて、この人すごい勇気だな、と思いました。『細い目』が公開されたのは、9.11 のあとです。民族不寛容やイラク戦争が起こり、文化の異なる人々がどのようにして共存していくか、を多くの人が考えた時代。そんなとき、ヤスミンの映画を観ると「多民族がうまく暮らしている世界があるんだ」と思わせてくれた。このことは、ポスト 9.11 の世界に一番必要なことだった、と僕は強く思います。

今後は彼女の意思を受け継いだ「ヤスミンチルドレン」が映画界を引っ張っていくでしょう。僕も末席に加えてもらいたくてアジア映画の紹介を続けています。これからのマレーシア映画が楽しみでなりません。

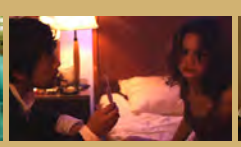
石坂健治
東京国際映画祭「アジアアの未来」部門
プログラミング・ディレクター

字幕を工夫することで、ヤスミンの2つのメッセージが伝えられる

ヤスミンの映画には多くの言語が出てきます。英語、マレーシア語、タミール語、北京語、広東語……すべてを色分けすると10色ぐらいになるでしょう。これが多民族国家マレーシアの現実で、ヤスミンは「民族ごとに話している言語は違う。でも、言語を学べばコミュニケーションはとれる」と、映画を通してメッセージを送っていたと思います。でも今回、『細い目』で、あえて台詞をできるだけ忠実に訳し、言語の種類によって字幕の色を変えて表現してみました。これは、ヤスミン作品の 2 つの魅力を同時に伝えたかったからです。1つは、マレーシアを知らない人でも伝わるおもしろさ。もう1つは、マレーシアの事情を知っている人が感じるメッセージ。この2つの橋渡しをしたいと思いました。厳密にいうと言葉と民族性は一対一ではありませんが、言語を区別することで、登場人物の民族性をわかっていただけたのでは、と思います。ヤスミン作品の魅力は、現実には無い世界を描きながら、でも、そういう世界があってもいいよね、と思わせるところ。観客は、泣いて、笑って、観終わったら少し考えて、明日からちょっと真似してみようかな、と思う。それを積み重ねていくと、いつか違うマレーシアになっていくのかもしれません。

山本博之
京都大学准教授

マレーシア映画ウィーク上映作品：左から【長編映画】日馬インディペンデント作品「破裂するドリアンの河の記憶」、「クアラルンプールの夜明け」、「心の魔」、
【短編作品】短編オムニバス「スリードア・ホラーズ 2013・2014」、シャリファ・アマニ作品「カンポン・バンサー」、「イヴ」、ピート・テオ作品短編オムニバス「15 Malaysia」、ミュージックビデオ「HARI MALAYSIA"SLIPSTREAM"」「HERE IN MY HOME」










マレーシア映画ウィークの様子



Sharifah Amani
シャリファ・アマニ
女優・監督

自分自身を深く観察していき、それがゼロに達したとき。
私たちは結局“人間”なの

——ヤスミンの教えで心に残っていることは？

「よりローカルなモノを作ることで、より国際的になる」という言葉。初恋をして、失恋して、騙されたり、愛する人を失ったり。そういうことは世界中の人々が経験する普遍的なテーマでしょ。だから、よりローカルであり、よりパーソナルなモノを作ることによって、多くの人が理解してくれると思う。私たちは、結局は人間なのだから。

——日本人はなぜヤスミン作品が好きだと思う？

日本人は子供の頃から多くの芸術作品に触れているので、教養があり、作品の良さを感じることができるからだと思う。また、ヤスミンの作品はマレーシアの良い面も悪い面も含めて、マレーシアという国のアイデンティティがこめられている。だから日本人にも気に入られているんじゃないかな。今後も、このような作品が増えれば、もっと受け入れられていくと思う。



Sharifah Aleysha
シャリファ・アレイシャ
女優・監督

彼女はいつも広い視野で物事を見ていた。
日本人は、その意図をわかってくれている

——ヤスミン作品で伝えたいことは？

作品のなかで、それぞれの宗教について描いているけど、大事なテーマは「愛」と「赦し」。ヤスミン監督はマレーシア社会でいろんな問題に晒されていたこともあり、マレーシアのお客さんの中には細かい問題に目がいって全体のテーマが見えていない人もいる。その点、日本人の方が、作品全体を受け入れている気がする。また、彼女の作品はとてもオープンなので、観た人はありのままの感情を表現できるようになったりすると思う。

——来日した感想は？

日本の劇場で、直に日本のお客さんの反応を聞き、感じたのはとても貴重な体験。「アレイシャー！会えて嬉しい」って感激の涙を流す人もいて、そんな反応は初めてだったので本当に驚いた。トークの時もさらに作品を知ろうとしてくれる姿を見るのがとても嬉しかった。



Ng Choo Seong
ン・チューセン
俳優

出張の多い人だったから、
今でもオフィスにフラっと帰ってくるような気がする

——ヤスミンの存在は？

ヤスミン監督はとても多くのことを僕らと共有してくれた。彼女の存在感はとても大きくて、僕は彼女が亡くなったとは思えない。

——来日した感想は？

『細い目』の上映10年後に日本に呼ばれるとは思ってもみなかったよ。今回来日して、日本にヤスミン監督のファンが大勢いることを実感した。彼女の作品が日本でも受け入れられるのは、作品の根底にながれる「愛」というテーマが普遍的だからだと思う。CM制作を一緒に行っていたときも、「愛」というテーマで人々の共感を得られるものを作るように、とヤスミン監督によく言われていた。だって『ファインディング・ニモ』や『モンスターズ・インク』を観て、僕達は魚でもモンスターでもないのに、涙を流すことができる。人の心に「愛」が届けば、共感を得られるんだ。

WAU インタビュー

マレーシア映画ウィーク来日ゲストにきく

それぞれの心の中で 生き続けるヤスミン・アフマド

2000年頃より起こった、マレーシアの若手監督が多くの国際舞台で活躍したマレーシア・ニューウェーブと呼ばれるムーブメント。彼らを牽引していたのは、2009年に急逝したヤスミン・アフマド監督でした。その短すぎる監督人生の中で制作された作品はキラキラと輝くものばかり。その彼女と深いゆかりのある方々にとって“ヤスミン”とはどういう存在なのか。現在の想いを語ってもらいました。



ヤスミン・アハマド
Yasmin Ahmad

(1958-2009)マレーシアの女流映画監督、脚本家。日本人とのクオーターで親日家。2009年に急逝。マレーシアの若手監督を牽引するオピニオンリーダーの早すぎる死に誰もが大きなショックを受けた。



Orked Ahmad
オーキッド・アフマド
ヤスミン・アフマド監督の妹

彼女の映画は、私たちが見ないようにしていた
リアルな現実を描いていた

——ヤスミン作品について

A：彼女は実話を紡ぐスタイルで作品を作った。だから彼女は、自分のことを「ストーリーテラー」と呼んでいた。彼女の作品はとてもリアルで、一部のマレーシア人はそれを怖く感じたと思う。まるで現実を映す鏡だったから。意識することを避けていたことも含め、何もかもを彼女は映画の中に描いたの。

——ヤスミンという姉について

彼女が映画を作ったのは、両親を喜ばせたかったからだと思う。『ラブン』は父と母を描いたものよ。すべてのストーリーに実話がベースにあって、『ムクシン』に出てきた家は、以前、私たちが住んでいた家そのものよ。映画のエンディングに私たち家族みんなが出演していて、「両親が死んでも映画のなかで会えるから」と言われたけど、結局は逆になってしまった……。夢は、いつか「ワスレナグサ」を作品にすること。



Jovian Lee
ジョビアン・リー
ヤスミン・アフマド監督の同僚、
『Yasmin How You Know』編集著者

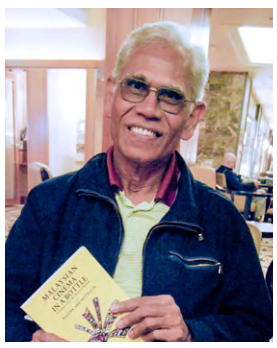
人は誰もが悲しみを経験する。
彼女は、悲しいときこそ人生は輝く、と教えてくれた

——ヤスミンの魅力は？

彼女は言葉や文化を学ぶと決めたら、その民族の人物になりきっていた。まるで役者のように、オフィスで突然、両手をあわせて「ナマステ」とみんなに挨拶して回ったり、中国人のウエイターに流暢な北京語で話しかけて、どれだけ中国が好きかを語ったり。そんな彼女と話した人はみんな、彼女に恋をした。ものの3分で、彼女が好きで好きでたまらくなる。また、彼女はいつも「悲しい事を体験した人ほど人生は輝く」と教えてくれた。「辛いときは、その思いに寄り添うといいの。泣かないで。心の奥深くにある気持ちに触れられるチャンスだから」と教えてくれたんだ。

——日本の印象は？

美しいデザインにあふれている国。道路のマンホールのカバーまで、綺麗にデザインされているのは本当に驚いた。



Hassan Muthalib
ハッサン・ムタリブ
監督・ライター・研究者

ヤスミンは寅さんが好きだった。
紹介したのは私だよ

——ヤスミン監督との出会いは？

インディーズの作品上映会を開いている「Malaysian Film Club」で出会った。彼女の作品『ラブン』も、最初にこのクラブで上映された。この作品を見たとき「これまでのマレーシア映画と全く違う」と思った。その後私たちはとても親しい仲になり、彼女の作品が完成すると、私が試写に呼ばれてコメントをすることも度々。彼女がバリ島で台本を書いていたとき、宗教的な質問をしてきたことも。彼女は私をグル（師）の一人だと呼んでいたよ。

——『男はつらいよ』が好きだったとか？

山田洋次監督の作品をヤスミンに紹介したのは私。ある時、ヤスミンが海外からの飛行機の中で『たそがれ清兵衛』を見て感激して帰ってきた。「寅さん」シリーズがあることを紹介すると、48作品のDVDをすべて購入し、毎週金曜日の夜に会社の試写室で鑑賞会をしていたよ。



Pete Teo
ピート・テオ
歌手・俳優・プロデューサー

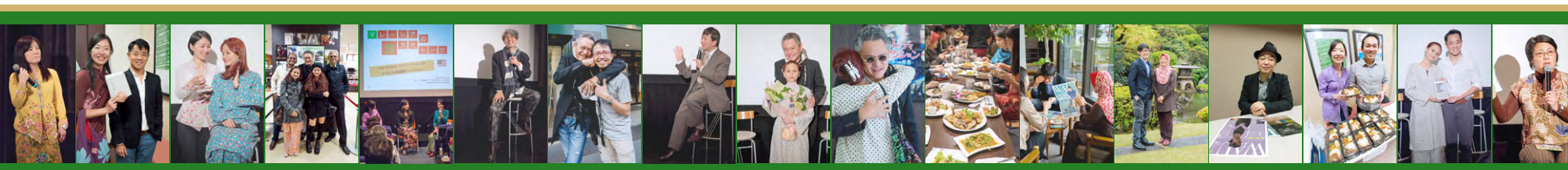
彼女のオファーは、内容なんか聞かなくても全て
OK！やるよ！と言うつもりだった

——ヤスミンとの思い出は？

ヤスミンは数少ない尊敬し合える仕事仲間。彼女との仕事は本当にやりやすかった。こちらをプロとして認めてくれていて、余計な口出しは一切しなかった。だから『タレンタイム』の時も僕のファイナルミックスを聞いたのは、上映の直前。しかも一発OKだった。彼女は一緒に組んだ仲間をリスペクトして信頼しているんだ。僕も、彼女からのオファーには無条件でOKするつもりだったのに、亡くなってしまった事は本当に残念だ。

——今後の活動は？

ヤスミンと最後に交わした言葉で印象に残っているのは、僕たちは作品を通じてマレーシアという国が抱える問題を提議してきたけど、できればこれからは別のテーマが描けたらいいねということ。アーティストはそれぞれ活動の幅を広げて行かなくてはならないし、彼女もそれを望んでいると思う。



WAU gallery

Little India

写真 Leonard Selva ｜ 文 Aki Uehara

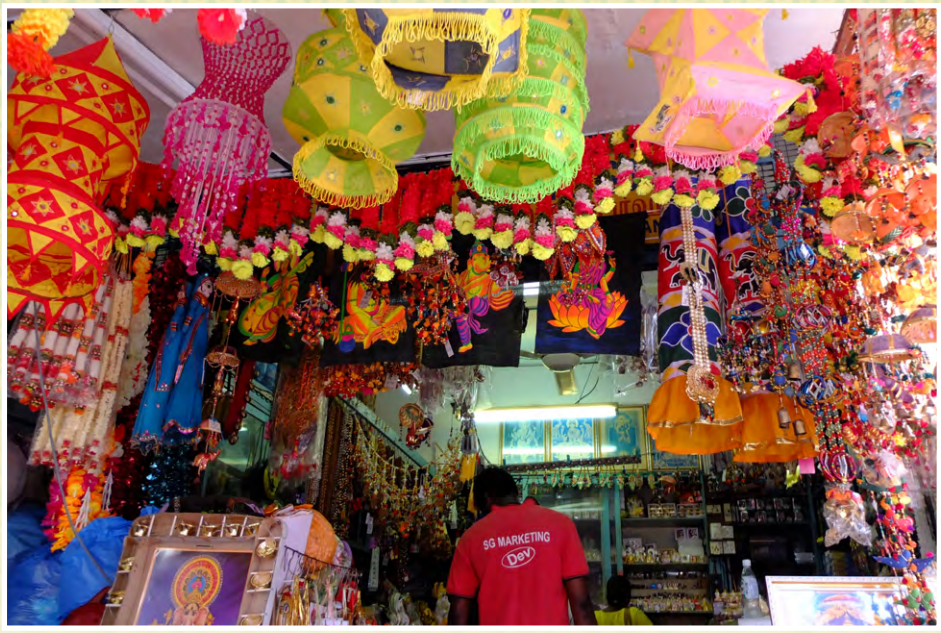


交易の中継地として発展したペナン島ジョージタウンの中心地に位置するリトルインディア。インドからも多くの商船が立ち寄り、現在でも色濃い文化が根付いています。街に一歩足を踏み入れると、深みのあるカレーを彷彿とさせる香辛料の香りと大音量のボリウッド音楽、軒並み連なる色とりどりの生地屋さんに五感が刺激を受ける。赤や黄色の装飾品が街を彩り、耳を澄ませば、ヒンドゥー寺院から鐘、太鼓、リード楽器の音の響きが漏れ聞こえる。ここは、マレーシアの中の小さなインド。



- インド系の料理には欠かせないスパイスの一種「ウコン（ターメリック）」。女性の伝統的な美容法にも取り入れられてきた。
- ヒンドゥー教の大祭「タイプーサム」にて装飾を施された2頭の牛が、ムルガン神を祀る山車を曳く準備をしている。
- ヒンドゥー教の光と彩りの祭典「ディーパバリ」の際に家を飾る色鮮やかな装飾品。
- リトルインディアに店を構える店主。1920年頃からこの地域で仕事をしている人たちも多い。





マレーシア リゾートクラブ
http://mrcj.jp
マレーシア、ボルネオ地域専門旅行会社
（株）エムアールシージャパン／東京都知事登録旅行業 3-5248 号

カフェ よたっこ
http://yotacco.exblog.jp
おらがちの畑のもん
畑の野菜と地粉とお豆さん

BOOKS Kinokuniya
紀伊國屋書店新宿南店6F
https://www.kinokuniya.co.jp/c/store/Books-Kinokuniya-Tokyo/
日本最大級の洋書売場！

WANTED
サポーター・広告募集
WAUを応援してくださるサポーターを募集しています。詳細はお問合せください。印刷費などの活動資金として、大切に使います。

Cinem@rt
シネマート六本木
シネマート新宿　シネマート心斎橋
http://www.cinemart.co.jp

ムティアラ・アーツ・プロダクション
http://mutiara-arts-production.com
文化交流事業の企画制作、通訳・翻訳業

オッド ピクチャーズ
http://odd-pictures.asia
国内外映像映画制作・マレーシアロケ

マレーシア ごはんの会
http://www.malaysiafoodnet.com
日本でマレーシアごはんを楽しむ会

編　集　後　記



今回特集したマレーシアのカラフルスイーツ。初めて見たときは正直ギョッとしましたが、食べてみると、甘すぎず、素朴で、幼い頃によく食べた和菓子の味に似ていました。そういえば「マレーシア映画ウィーク」で来日したオーキッドさんから頂いたサツマイモのポテトチップス。おばあちゃんが作ってくれた味にそっくりだったな。

古川 音
Oto Furukawa

ライター。首都クアラルンプールに4年滞在した経験を活かし、「All About」や「CREA」ウェブサイトにてマレーシアの記事を執筆。また「マレーシアごはんの会」にてイベントや料理教室を主催。
古川音 HP　http://www.otofurukawa.com
マレーシアごはんの会 HP　http://www.malaysiafoodnet.com



学生時代からの憧れの絵本作家ユソフ・ガジャさんに取材をしたり、マレーシアを代表する俳優ブロント・パラエさんの取材通訳を務めたり、全面的に協力させていただいた「マレーシア映画ウィーク」でも私たち三人の力を各所で発揮できたことをとても嬉しく感じています。今後も更に活動の幅が広がることを願っています。ぜひ応援よろしくお願いします！

上原 亜季
Aki Uehara

ムティアラ・アーツ・プロダクション代表。AFS生として一年間マレーシアの高校に留学。Universiti Sains Malaysiaの大学院にてマレーシアの伝統芸能の研究を行い、修士号取得。国際文化会館勤務を経て、現職。東南アジア芸能コーディネート、イベント企画・制作、記事執筆、マレー語通訳・翻訳。　http://mutiara-arts-production.com



WAUも早いもので、通算4号目。毎回、皆様にレアな情報をお届けしようと、いろいろアイデアをひねっています。そんな中、去る4月、「マレーシア映画ウィーク」という私たちにとっての一大イベントを開催させていただき、今回、号外で開催レポートをご紹介できることを心から光栄に思っております。次は何をやろうかな！私たちの活動は続きます。ご期待ください！

高塚 利恵
Rie Takatsuka

映像プロダクション、オッドピクチャーズ代表。インディペンデント映画プロデューサー。日本国内にて映像によるプロモーションの企画、撮影。マレーシアの映像制作プロダクション（ODD PICTURES MALAYSIA）と連携した映像・映画製作など。
HP　http://odd-pictures.asia

マレーシアの文化情報を知りたい方へ、情報提供・講演もいたします。どうぞお気軽にご相談ください。

Copyright (C) 2015 HATI MALAYSIA All Rights Reserved.